

creativity

ハサミを選んだのは、

京都は嵐山。美しい渡月橋を背に、

若冠25歳で日本唯一の似顔切り絵師の肩書きをもつ土田祥子さんが、今日も紙とハサミで人物を描く。

ペンではなく、ハサミを手にとった彼女の感性はいったいどこからくるのだろうか。

カミの啓示



土田・祥子 (つちだ しょうこ)

1982年生まれ。似顔切り絵師。京都精華大学芸術学部造形学科卒業。在学中の2001年秋頃から、京都・嵐山の路上にてハサミ1本で細部まで仕上げる「似顔切り絵」を始める。2007年、NCN似顔絵東京大会白黒テクニック部門入賞(切り絵での参加はただ一人)。ファッション誌のアートワークを似顔切り絵で担当したり、テレビで実演したりなど、メディアでも幅広く活躍中。著書に「切り紙」でつくるすてきな模様(PHP研究所)がある。



<http://gallery.tsuchinokokirie.com/>

似顔切り絵師としての原点

似顔切り絵とは、その場でお客さんの顔に似せた切り絵を演じるパフォーマンスのこと。日本でただ一人の“似顔切り絵師”と名乗るに相応しく、「紙」と「ハサミ」だけで、ユーモラスで愛嬌のある顔を形容できるアーティストは、土田さんをおいて他にはいない。そんな彼女が、初めて人の顔を切ったのは高校の頃だという。

「すべてを紙とハサミだけで創作したのは高校の頃が初めてですね。すごく(外見に)特徴のある同級生がいて、切ってみたくて思ったんです。切ってみると意外に上手く切れた(笑)。評判もよかったので、ハマってしまいました」

似顔絵の手段は「切る」ではなく、「描く」でもよかったはずだ。なぜ、切り絵なのだろう。

「切り絵は、紙を半分に折って切ります。だから私自身、紙を開くまで作品の全体像がどうなっているかわからないドキドキ感があります。そこがすごく面白い。それに動作がシンプルなので、残す面と切り取る面のバランスが難しい。観察力のほかに、想像力も必要です。常に自分も緊張しながら切っています」

下書きなしの一発勝負。消しゴムも使えない。失敗も許されない。そんな緊張感を土田さんはむしろ楽しんでいるようだ。

カッターナイフなどを一切使わないことにも、土田さんはこだわっている。滑らかな曲線は、ハサミでしか生み出せないそうだ。そもそもハサミを使うという発想の原点はどこにあったのだろう。

「ハサミで何かを作ったのは、保育園の時から最初です。本の付録によくある工作セットみたいなもの。だから、ルーツはすごく小さい



「もし、ハサミと紙を取り上げられたら、生きていけないと思います」

時にありますね。中学生の頃は、苦手だった数学の時間に、こっそりハサミを使って遊んでいました(笑)。ノートの端っこで先生の顔を切ったりして。顔の細部はペンで描いてたんですけど」

土田さんにとって、ハサミを選択したのはしごくナチュラルなことだった。人間には頭で考えて取捨選択する人と、インスピレーションのままに生きる人がいる。土田さんはどうやら後者のようだ。彼女自身、「私は感覚で生きるタイプの人間」といい、さらに「もし、ハサミと紙を取り上げられたら、生き

ていけないと思います」と語る。ハサミと紙を使うことは、まさにカミの啓示だといえよう。

ストリートで演じる似顔切り絵の魅力

切り絵といえば、動物や花でもよかったのではないだろうか。なぜ人間の顔だけにこだわるのだろうか。

「もともと、顔というものにすごく興味がありました。モチーフの選び方って人それ



それだと思うんです。たとえば風景にしても、山だったり町並みだったり。それが私は顔だった。人間、同じ顔の人なんていないじゃないですか」

これまでに切った顔の数は、なんとおよそ6000人にのぼる。土田さんが、好んでストリートで切り紙を演じる理由はなぜだろう。

「動物や植物は切ってもリアクションが返ってこない。人は必ず何かリアクションを返してくれます。たとえば以前ストリートで、1日に2回来てくれたおじさんがいて、すごくうれしくて印象に残っていますね。それだけ、私の作品を気に入ってくれたってことです。花や動物はそんなことしてくれません(笑)」

自分の感情が作品に表れてしまうことはないのだろうか。

「私の場合、自分の感情によって作品に影響がでることはあまりありません。作品をつくりながらお客さんと話が弾んで、いつもよりさらに楽しい気分が切れた時は、自然に笑顔のものができあがったりします」

写実的なアートである以上、写実に徹する。作品に笑顔が多いのは、誰もが笑顔になってしまう土田さんの魅力を物語っている。

それにしても、ストリートでやる以上、騒音やギャラリーの声は避けられない。そんな気が散る状況で、切ることは難しくないのだろうか。

「切っている時は、周りは全然目に映りません。切る対象にそれだけ集中してるってことだと思います。集中しないと似ませんからね(笑)。だから、今まで切ったことがある方の顔はなんとなく覚えてますよ」

作品を仕上げた後に、お客さんと作品の写真をとるのは恒例の行事。写真を見れば、お客さんとの詳細なエピソードも頭に浮かん



『切り紙でつくるすてきな模様』

土田祥子著 定価1356円(税込)

問合せ先：PHP研究所
教育出版部 TEL075-681-8732
申込み先：PHP研究所
通販係 TEL075-681-8818

なお、本書は書店では購入できない商品です。ご注意ください。定価+代引き手数料400円がかかります。

でくるそうだ。

「この外国人の女の子を切った時は、鼻筋を通すために微調整したら、切り落としてしまったんです(笑)。でもその子は大丈夫と言ってきて。結局のりで貼付けたんですけど(笑)」

前人未到の道の先には ゴールがない

微笑ましいエピソードを語る柔らかな雰囲気とは裏腹に、作品の質に関しては真剣な眼差しでこう続けた。

「100パーセントの仕上がりだと思ったことは一度もありません。いつも紙を開いた後に微調整するんですが、ここはもっとこうしたほうがよかったとか、反省ばかり。そこがライブでやるおもしろさでもあるんですけど」

25歳で“似顔切り絵師”という日本で唯一の肩書きを背負うことは、同時に自分で道をつくることでもある。不安はないのだろうか。

「先のことより今が大切。そして今はとにかく楽しいというのが一番。飽きてしまったこともありません。友達によく頑固っていると言われるんですけど、私はバニラ味のソフトクリームが好き! と思ったらずっとバニラ味を食べていられる人なんです(笑)」

その目に不安は微塵も感じられない。似顔切り絵師として、感性の赴くままにつき進む彼女はどこまでもマイペース。将来は、切り絵を利用したアニメなども創ってみたいと語る土田さん。紙とハサミのもつポテンシャルを追求する志の高さには、どうやら頂上はないようだ。

Text by : 笹屋 竹

